歴史的町並み保存に関する研究動向

大　山　琢　央

I　はじめに

高度経済成長への契機となる池田隼人内閣が打ち出した“全国総合開発計画（全総）”による大規模な国土開発と都市化の風潮の中で、失われていく歴史的町並みを保存・活用する動きが現れた。その動きは、京都・鎌倉等での“古都保存”に始まり、1968年（昭和43）の倉敷市・金沢市の地方都市による町並み保存の条例制定、1974年（昭和49）の“全国町並み保存連盟”の結成といったように、有識者・地方都市・住民運動などのアクションを経て、1975年（昭和50）文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区制度（伝建制度）の結実を見る。爾来、歴史的町並み保存は観光・地域振興、まちづくりや都市計画の有用な方途として、40年近くにわたって用いられてきた。

しかし、その一方で看過できない課題点も多く見受けられるようになった。“歴史的町並み保存”というフィルターを通して地域をみれば、そこは生活空間のみならず、文化財・文化遺産として、また観光地としての複雑な機能を有している。加えて歴史的町並みに関わる“人”に視点を移せば、居住者、事業従事者、観光客、行政担当者など、それぞれに立場、思想、利害の異なる多様な人々が介在している。このような複雑な地域構造・環境に、歴史的町並み保存を行う上での課題点の一端を求めることもできよう。よって、歴史的町並み保存を主題とした研究は、その問題の所在やアプローチの仕方などは多岐にわたっており、学際的諸相を呈しているといえる。

さて、2004年（平成16）の景観法の制定と、これに合わせて文化財保護法が改正され、“文化的景観”の概念が新たに文化財の種別として加えられた。文化的景観は法律で「地域における人々の生活又は生業及び当該風土により形成された景観地」と定義されているように、棚田や里山といった農村景観などを保護対象としている。伝建制度は、あくまでも建造物群によって構成された景観を前提としている点で、同じ“景観”を保護する意味であっても、その性格を異にする。よって、これまでは優れた農村景観であっても、伝建制度では民家や建物としての歴史性や地域的特性が見いだせない限り、文化財として保護することは困難であった。また、これまでの景観行政の多くは、各地方自治体が条例を制定して独自に景観コントロールを行ってきた。景観法制定の背景は、こうした規制力の弱い条例に対応する法的根拠を与えるためのものでもある。町並み保存において伝建制度の有用性は、その“規制力”が大きな意味を持っていた。伝建制度を選択せず、景観条例などによる独自施策での町並み保存は規制力の弱さがネックであった。しかし、これからは景観法を活用した町並み保存を行うことで、伝建制度に匹敵する景観コントロールが可能となろう（宮本（2005））。

以上のように、歴史的町並み保存を取り巻く環境は、景観法と文化的景観の登場によって、伝建

制度のみならず、今後は多様な景観保護の選択肢が広がったという点に於いて、近年大きな転換点を迎えたと言える。よって本稿では、歴史的町並み保存をめぐる工学・観光学・地理学等の関連学問分野における研究動向を展望する。町並み保存が新たな段階へと進むと思われるこの時期において、既往研究を振り返ってまとめることは一定の意義があるものと筆者は考える。以下、Ⅱ章では歴史的町並み関連の概説書や雑誌（記事）を、Ⅲ章以降は景観保全・住民意識・評価・観光振興・真正性・その他と、取り上げているテーマ毎に研究論文を振り返り、Ⅳ章をまとめとする。

Ⅱ　概説書・雑誌など

歴史的町並み保存運動が本格的に始まった1970年代～80年代にかけては、保存制度の転換期でもあり、まず古都保存法や伝建制度の特徴や課題点を説明する記事などが多く見られた。日本建築学会編『建築雑誌』（1970）では「主集 景観保存」という特集を組んでおり、当時の文化財保護制度の現状と将来についてや、古都保存による歴史的環境の保存についてのレポートが述べられている。また1973年には、より歴史的町並み保存に特化した「主集 日本の町並と集落」が特集された。法律雑誌『ジュリスト』（1980）では「特集　文化財の保存と再生」が組まれた。伝建制度創設前後は、文化庁編『月刊文化財』においても町並み保存関連の記事が多く掲載された。その主なものとしては、1967年（昭和42）に早くも地方都市の「小京都」と呼ばれる場所の永久的保存を訴えた岡田（1967）、伝建制度創設後数年を経ての現状と課題点をまとめた岡田（1979）、木造建築が主流である日本の歴史的町並みを、対極的な石の文化である西欧諸国の町並みと比較検討した陣内（1982）などが挙げられる。

また単行本としての概説書としては、1982年（昭和57）から刊行された『図説 日本の町並み』（全12巻）のシリーズ本が挙げられる。“本邦初の町並み集成”と謳われ、全国各地の歴史的町並みを詩人や作家のエッセイといった平易な内容の一方で、郷土史や建築学の視点で専門的な解説も盛り込んだ良書であった。また1981年（昭和56）には西山夘三監修『歴史的町並み事典』が出版された。内容としては歴史的町並みの分類や成立の背景、町並み保存制度概史などに加えて、町並みのデザインや建物の修復、住民参加やまちづくり等、歴史的町並み保存の実務的な手引書として編集されている。また朝日新聞記者としてナショナルトラスト運動や、歴史的環境保全に対する取材活動を行っていた木原啓吉によって1982年（昭和57）に『歴史的環境－保存と再生－』が刊行されている。

この中で木原は歴史的環境保全の動きが国民レベルまで広がり、多くの人々が身近な歴史的町並みに対して関心を示すようになった証左として次の資料を提示した。1972年（昭和47）２月24日付『朝日新聞』に「保存・再生の必要な歴史的町並み」として全国169ヶ所が掲載された。これは同新聞社の取材ネットワークを元に、各地の行政・郷土史家・地元住民への照会によって情報収集した、初の歴史的町並み悉皆調査であった。1976年（昭和51）12月5日付の同紙日曜版の「歴史息づく町並み」には200を超える町並みがリストアップされた。さらに1978年には環境文化研究所編集による雑誌『環境文化』に「歴史的町並みのすべて」と題して特集され、朝日新聞とほぼ

同様の調査方法で、実に400ヶ所にのぼる歴史的町並みを収録するに至った。

木原が引用した雑誌『環境文化』は、上記の他にも1981年（昭和56）3月に「歴史的町並みの総点検」、同年12月には「特集 町並み町づくり」と題した特集などが組まれるとともに、全国町並み保存連盟が主催する「全国町並みゼミ」のレポートが毎年掲載された。全国町並みゼミは、各地で保存運動を行っている住民団体を中心に、行政関係者や有識者などが一堂に会し、町並み保存に関する意見・情報交換を行う会議である。すなわち、『環境文化』に掲載された各地からの報告は、当時の町並み保存における最前線の現状・課題点が述べられているのである。『環境文化』の廃刊後しばらくの間、町並みゼミの成果は報告書としてはまとめられるものの、一般向けに書籍化されることはなかった。しかし1999年（平成11）には全国町並み保存連盟発足25周年を記念し、1998年（平成10）の全国町並みゼミ東京大会での議論の内容を踏まえた概説書『新・町並み時代 まちづくりへの提案』が刊行された。70年代以降の町並み保存の流れを振り返りながら、次世代への保存活動の取り組みを模索する内容となっている。

また歴史的町並み保存に多くの著作がある西村幸夫は、2000年（平成12）に90年代に発表した雑誌記事や小論文を集めた『西村幸夫 都市論ノート』を刊行している。

Ⅲ　研究論文

1）景観の保全に関する研究（修理修景・デザイン・まちづくりなど）

歴史的町並み保存に関する研究論文はその性格上、建築学や都市計画学などの工学分野からの研究蓄積が目立つ。町並みは当然のことながら建築物の集合体によって構成される景観であるため、建物の修理修景の実態や、そのデザイン、また法制上の規制・ルールに対する現状・課題点等のいわゆる町並みにおける“ハード”面に関する研究テーマが顕著となっている。また、町並み保存は地域のまちづくりとも密接に関連しているため、景観計画や都市デザインといった内容の研究も多い。

その主なものを挙げると、渡辺・西村（1982）は旧建設省が行った全国の歴史的町並みの網羅的リストをベースに、都市の人口規模から分析し、特に旧城下町における町並みの“残り方”について考察している。町並み保存研究は今日に至るまでケーススタディが多い中で、早くからマクロスケールで町並みを考察した渡辺・西村の研究意義は大きい。同様な全国的視点での研究としては、伝建地区という限られた範囲での景観保全が、伝建周辺地区との景観の差異をより際立たせ、結果として都市という広範囲での視点からとらえた時に伝建地区が「陸の孤島」となり得る可能性を指摘した葉他（1998）の論考がある。葉他は、伝建周辺地区の景観保全の取り組み方を条例による地区指定の空間構造から類型化を行った。牛谷他（2002）は重伝建地区における“修景”の実態を事業担当者へのアンケート調査などから分析し、歴史的町並みにおける“規範”と“創造”の継承の在り方を示した。小林・川上（2003）は伝建制度が町並み保存に一定の成果をあげていることを評価する一方で、伝建地区決定への取り組みが円滑に進んでいないケースも少なくないことを指摘。伝建地区の保存対策調査を実施済みの全地区を対象に、町並み保存施策への取り組みの状況

を展望している。

事例研究としては、福川（1982）は奈良・川越の町屋・町並みの特性を分析し、町並み保存を行う現代的意義に迫り、温井（2000）は山形県大石田町の歴史的町並みを事例地として、建築と敷地の関係性を類型化し、主として住環境という視点からのまちづくりの方向性をさぐった。佐野他（2000）は岐阜県古川町の町並みを対象に、建築物の外観の変遷過程を分析し、その中で近年の新たな外観デザインの生成過程を位置づけた。

また、馬場先（2008）は金沢市の“こまちなみ保存区域”を事例として、当該地区の建物の残存状況及び連続性に着目し、実態調査を通してそれらを数値化した。“こまちなみ”とは金沢市独自による歴史的町並み保存施策である。伝建制度の対象とはなりにくいものの、金沢らしい良質の歴史的景観が残っている小規模なまとまりを指定するものである。調査結果として馬場先は、「こまちなみ保存区域における町並みの連続性は、一部に於いては状態が良いが、区域全体では必ずしも良好とはいえない」とまとめた。こまちなみ保存区域に関連する考察としては、小林他（1999）が「既成市街地に立地する町並みに於いては、建築物の更新の進行を前提としつつ、町並み景観保全のための建築形態コントロールと居住環境のバランスを取ることが求められる」という視点から、数式モデルを用いた定量的な分析を試みている。

また「観光活動設計」や「景観管理計画」といった歴史的町並みを核とした地域のプランニング、町並みまちづくりへの提言型の論考として福岡県筑後吉井伝建地区を対象に考察した大森・西山（1997、2000）などが挙げられる。

2）住民意識に関する研究

歴史的町並みは他の文化財と異なり、その中での人々の生活が営まれている。町並みは地域の人々の不断の努力によって維持されていく必要があり、また修理修景に対する規制など応分の負担を住民に強いることとなる。よって、町並み保存・伝建制度の取り組みに際しては地域住民の自主性とコンセンサス（合意形成）が必要不可欠である。伝建制度におけるイニシアチブが市町村に与えられ、その申し出によって国が重伝建地区を“選定”するボトムアップ方式である点は正にここにある。しかし、冒頭に述べたように地域住民の間にも、立場や職種、性別、年齢別などによって町並み保存に対する考え方や利害も様々であり、また自宅が文化財や規制の対象になることへのアレルギーなども加わって、合意形成までのプロセスが困難を極めたケースも少なくない。町並み保存の担い手である地域住民らの意識や考え方を通して地域を考察することは、町並み保存の基礎的研究といえる。

論考としては、岡崎・原科（1995）は奈良県橿原市今井町を事例として、伝建地区指定までの地域住民の合意形成までのプロセスを詳細に追い、その過程における阻害要因・問題点などを明らかにした。また梅宮・岡崎（2005）は歴史的町並みにおける都市計画道路の問題に着目し、町並み保存のための道路計画の見直しに関する全国調査を行った。その中で、住民間の道路を巡る意見

対立のあった愛知県犬山市を事例とし、見直しに至るまでの合意形成過程を詳細に追った。

岡崎他（2001）は千葉県佐原市を事例に、まちづくりの過程を概観し、アンケート・聞き取りなどから住民意識の変化について考察している。勝又他（2001）は埼玉県川越市の“大正浪漫夢通り”を対象に、当該商店街の再生とまちづくりを取り組みのプロセスや組織体制から論じた。千歳（2003）は福岡県秋月を事例に、アンケート結果から町並み保存に対する住民の意向を明らかにした。公文他（2003）は工学的見地から、岐阜県高山市の伝建地区に居住する住民属性間での保存制度や居住性、また家屋改修の際の優先箇所に関する意識実態を明らかにした。大島（2005）は長野県楢川村奈良井宿を事例として、伝建地区内の住民意識が町並み景観を地域アイデンティティとして捉えていることを明らかにした。中尾（2006）は福島県下郷町の大内宿を事例地に、そこを訪れる観光客と地域住民双方への聞き取り・アンケート調査を通して、大内宿での観光客の特性と行動パターンなどを明らかにすると共に、町並み保存事業に対する地域住民の意識と、商業活動との葛藤を詳細に分析している。調査の結果、「“伝統的な生活文化”と“共同体意識”が大内宿の魅力となり、今日まで保存事業の進展と共に町並みが維持され、更に観光客を多く呼び込める経済効果を生み出した」と述べている。また、張・市南（2007）は岡山県倉敷美観地区を事例にアンケートによって、現在の住民意識を分析した。

3）町並みの評価に関する研究

歴史的町並みに対する評価には、前節に挙げたような地域住民の意識に関する研究にもアンケート調査の結果などを通して反映されているが、本節では住民とは別の立場である外部からのまなざしからアプローチされた研究を取り上げる。

一つには町並みを訪れた観光客による評価である。直井（2002）は、観光人類学系の海外論文を多用しながら今日の歴史的町並みの特性を、単に過去の領域に留まるだけではなく、現代の産物としての側面も持っており、「歴史的町並みはしばしば商業目的あるいは保存目的の為に、現代の世代によって操作される」と位置づけ、町並みの本物性（＝オーセンティシティ）に関して言及している。その中で、直井は「多面的な観光地の特性を兼ね備えた事象」である歴史的町並みを実際の訪問客が、とりわけ「手付かず」もしくは「人為的に操作された要素」をどのように評価するかを、岡山県倉敷美観地区を事例地として、来訪者のアンケート調査の分析を通して行っている。直井は、「歴史的町並みにおける人為的な整備は、本物性を重視する層の訪問客の満足度に負の影響を与える可能性が高いことを示唆することが出来る」としている。町並みの真正性に注目し、その意識調査を来訪者に求めた論の展開は興味深い。しかし、来訪者の意識もさることながら町並みの真正性は、文化財的価値との相克のなかにあってより深刻化する問題でもあると筆者には思われる。

もう一つには、CVM（仮想市場評価法）調査を用いて、歴史的環境を定量的かつ客観的に評価する研究事例である。CVMとは市場での取引が存在しない環境財などについて仮想的な市場を創設し、アンケート調査などの手段を通じて模擬市場取引を行い、支払意志額を直接受益者（観光客

など）に尋ねることによって評価額を推定する手法である。例えば「○○を保護するために、観光客に「○○保護税」を導入するとした場合、あなたが支払うならばいくらが妥当な金額だと思うか？」といった設問のアンケートが多い。無論、CVMはアンケートによる意識調査に基づいているため、バイアス（＝偏り）など調査結果に対して憂慮される点もあるが、近年では町並みの他、農村景観や自然環境に対する評価を中心に研究蓄積が進んでいる。これまで“文化資本”に対しては公益的側面が強いうえに、その実質的効果は人々の生活の質に深くかかわるものであるため、他の資本に比べて貨幣による直接的な経済的評価をすることは困難であった。そのことが文化資本の本来の価値を、過小評価（または過大評価）されているのではないかと考えたのが垣内・吉田（2002）及び垣内・西村（2004）であり、富山県五箇山の合掌造り集落を事例に研究を行った。結果、五箇山の現状の維持・保存及び観光資源としての文化的景観の活用に対し、非利用者を含む国民及び利用者である観光客集団から顕示選好によって確固たる支持が得られた他、文化的価値の便益が極めて大きいことなどが明らかとなった。垣内は五箇山の他にも、飛騨高山を事例として同様の研究を行っている（岩本他（2006））。

4）観光地形成及び変容・地域振興などに関する研究

歴史的町並み保存の動きが本格化した1970年代と同時期、国鉄によってポスト大阪万博の観光需要喚起のため、日本美の再発見をキャンペーンコンセプトとする“ディスカバージャパン”キャンペーンが始まった。これにより“小京都ブーム”“国内旅行ブーム”が起こり、地方都市の歴史的町並みは一躍、観光地として脚光を浴びることとなった（大山（2006）、森（2007））。以後、現在まで町並み保存の取り組みは常に観光振興や、これに伴う中心市街地活性化などの地域振興策と結びつくようになった。これらを論じた研究例としては観光学・観光地理学などからのアプローチが多い。ケーススタディが主流ではあるが、マクロスケールでの論考としては、岡本他（2003）が全国の重伝建地区を対象に、各市町村の町並みを活かした観光施策を分析し、施策とその結果である観光客数との関連性について明らかにしている。

事例研究に目を移すと、市川・白坂（1980）は妻籠宿を中心とする木曾地方を取り上げ、入込観光客数の分析を通して、当該地方の観光地特性を明らかにした。小堀・宇野（1998）は当時、重伝建地区に未選定であった埼玉県川越市を事例として、開発と観光地化の中での町並み保存の可能性を探った。また小堀（2001）は、大分県日田市の豆田・隈両地区における町並み保存による観光地形成過程を追った。結果、「豆田・隈では観光地化は、住民主体の地域づくり活動の結果として起こったものという共通認識がある」とまとめた。溝尾・菅原（2000）は埼玉県川越市を事例に、一番街商店街の商業振興と町並み景観の保存との相関を考察した。溝尾・菅原は「一番街の町並みに対して、観光客という外部の人々が高く評価したことによって、現実に町並み保全が商業の売上げ増加につながった経済効果を生んできたことで、当該地域の人々は蔵造りを保全する自信と確信をもつことになった」と結論付けた。荒井・十代田（2000）は、富山県五箇山の合掌造り

集落の観光地化が、住民にどのような影響を及ぼしたかについて考察した。荒井・十代田は五箇山の観光地形成過程を6期区分で捉え、民宿を営む観光従事者の観光地化に伴う成長過程は「決意」「自覚」」「成長」「成熟」の4段階に分けられることを明らかにした。また縄手（2001）は、岐阜県白川村荻町の合掌造り集落を事例地として、当該地域の町並み保存と観光に関する「認識」に着目し、観光者及び地域住民へのアンケート・聞き取りによって考察。結果から「生活」「昔」「観光化」というキーワードを抽出し、観光者と地域住民が抱く認識の共通項との相違を明らかにしている。黒見・坂元（2002）は、岐阜県岩村町伝建地区を事例に当該地域で提供される観光情報の内容をメディア毎に分析し、課題点を探った。結果、ヒューマンメディアを高評価した上で、インタープリター（解説員・ガイド）の養成などが重要であると述べている。

上記のような論考がある一方、急激な観光地化が地域にもたらす弊害も看過できない状況が出てきた。具体的には観光客のモラル、マナーに起因するもの、交通渋滞や不特定多数の人々の来訪による防災・防犯、住民のプライバシーへの懸念などいわゆる“観光公害”と呼ばれるもの、華美な装飾による景観の破壊、また観光による利潤をめぐる地域内での格差などが挙げられる。とりわけ、90年代以降の世界遺産観光ブームによる白川郷・五箇山ではこうした状況が顕著であり、才津（2003）は世界遺産登録が白川郷に与えた影響として、観光客数及び観光業者の増加、現状変更行為許可申請の件数増加、また増える観光客への規制の取り組みとして冬季に行われている“合掌造りのライトアップ”を取り上げて分析している。森田（2004）は白川郷における流入交通量の分析を通して、持続可能な観光振興のための交通戦略を考察している。また黒田（2008）は自著の中で、交通渋滞の実態や観光による経済的メリットに対する住民間での意識の差などを紹介している。黒田は観光客の増大に関しても言及しているが、白川郷において観光客の多い時間帯や人が集中する場所は限定的であり、観光公害は事実であっても一側面に過ぎないと述べており、観光現象に対する多面的見方の必要性を指摘していると言える。

他の伝建地区に対する論考としては、志賀（2000）は岐阜県高山市を事例に、歴史的町並みを観光資源として活用する際の問題点と、観光が町並みに果たす役割を考察した。また、大山（2005）は岡山県倉敷美観地区における70年代以降の観光地形成のプロセスをまとめた上で、急激な観光地化が町並みの俗化を招き、地域住民の意識にも“観光地・観光客”に対して根強い否定的・懐疑的意識が生まれたことを明らかにした。また、前述した中尾（2006）論考でも大内宿における観光地化と地域住民の経済的な自立が、“大内宿らしさの喪失”と“共同体意識の脆弱化”を抱かせていると分析している。また、地域も観光客のニーズに応えようとしているが、その認識にズレも生じている。そして、現況の問題点を打破する為に理想的な観光地作りを模索するものの、具体的行動に踏み出せない悪循環に陥っている現状を明らかにした。

5）町並み・景観の“創出”や真正性に関する研究

町並み保存、とりわけ文化財保護法による伝建制度下においては、町並みの“本物性・真正性

(=Authenticity:オーセンティシティ)”が強調される。伝統的建造物は修理することで伝統的なファサードを残し、一般建築物は修景を通して、周辺の伝統的な景観に調和させることで伝建地区全体の価値を高めさせる。一方で、伝統的な景観にそぐわない建物や工作物は排除されていく。当然のことであるが、現在の景観は様々な時代の歴史・文化・生活等の重層的構造によって成り立っている。例えば鳥取県倉吉は石州瓦と白壁の町並みが重伝建地区として選定を受けているが、伝建地区内及び周辺には昭和期の看板建築や商店街のアーケードなどがあり、近年の“昭和ノスタルジー”ブームを受け、その価値が評価されてきている。しかし、これらは白壁の町並み保存においては景観にそぐわないため、両者の保存を考えた場合、景観保全の整合性に苦慮していると聞く。こうしてみると町並み保存は、景観の凍結的保存でも過去の景観の復元でもなく、“伝統”という言葉によって不要を“排除”し、現代の景観を“創出”していると言えるだろう。

さて、観光研究においては文化・観光人類学などから、文化が観光消費の対象となる（文化の商品化）過程において、その文化が本来持っていた意味が失われるという“文化の真正性”に関連する議論が行われて久しい。民俗学における“フォークロリズム”や、また“伝統”と呼ばれるものの多くが近代以降に人工的・意図的に改変されているという、イギリスの歴史家ホブズボウムの指摘する「創られた伝統」論などもよく知られているところである。

こうした視点を踏まえて福田（1996）は、沖縄県竹富島伝建地区における赤瓦屋根の町並み保存を“伝統文化の創造”を通して考察した。福田によると赤瓦屋根の出現は人頭税廃止後の1905年（明治38）で、実際の普及は大正期以後であり、しかも裕福な層に限られていたものであったという。赤瓦屋根の一般的な増加を見せるのは町並み保存運動の隆盛（80年代）と軌を一にしている。町並み保存の中で赤瓦が強調される一方で、赤瓦屋根の歴史そのものは積極的に語られることなく排除されていき、観光客とっては「伝統的なもの、古くから存在するもの」として受け止められ、赤瓦の伝統性はより強化されていくというプロセスを明らかにした。同様の論考として民俗学からは森田（1997）も竹富島を事例として、観光という新興の文化（≒外部インパクト）を取り込む文化包摂のプロセスと人々の意識変容を検証した。

大平（2003）は近年、各地において農村集落が地域おこしや文化財保護の潮流の中で保全の対象にされてきたことに着目。その中でも明治以降に武家地の大半が農地化し、農村的景観を呈している近世城下町の旧武家地４ヶ所（秋月・三日月・小幡・亀田）を取り上げ、歴史的環境保全の中に旧武家地の農地がどのような位置を占め、そこにはどのような特徴があるのかを考察した。大平は４ヶ所の事例を通して、保全手法の中に農地を肯定的に位置づける秋月と、どちらかと言えば否定的に位置づける三日月、小幡、亀田を対比させ、前者の事例を評価しつつ、後者を批判的に述べている。その理由として武家地における農地化は、近世から明治以降の武家地そのものの崩壊・変質の「象徴」であるということ。その「象徴」を保全する事例によって受け止め方が異なり、秋月は「景観の積層として重視」する一方で、他の３つの事例では「近世の要素を重視する」ことで農地を無視・排除する傾向があるということ。そして近世の要素を重視するあまり、「歴史的景観を

捏造する可能性」を内包していること等を挙げている。

須山（2003）は富山県井波町瑞泉寺門前町と、井波町を中心に展開する井波彫刻業を対象とし、井波彫刻業が門前町の景観をいかに変容させ、どのような役割を果たしたかを考察している。須山によると彫刻業者は1970年代半ば以降門前町に進出し、近世末～近代にかけての商家建築を借り、作業風景や作品が外部から見える工房を意図的に作った。商家建築と井波彫刻に共通するキーワードは「伝統」である。前者は五箇山交易で財を成した井波商人によるもので、後者は社寺大工が20世紀初頭に形成した産業である。故に両者には成立基盤の上でも、時代的な関係に於いても接点が無い。しかし歴史的背景を知らない観光客は、この町並みと伝統的工芸品との組み合わせに何ら違和感を覚えない。それは同じ「伝統」というキーワードで、門前町の景観構成要素をくくれるからである。これに対し須山は論文中で、ボブズボウム・レンジャー編『創られた伝統』の内容を引用しつつ、「門前町はゲストの描いた「伝統」イメージを忠実に表している」と述べた。

また、牛谷他（2004）は工学的見地から長野県奈良井宿を事例として出梁造の建造物の変容を定量的に分析し、伝建制度が奈良井の出梁造の消失をとどめることに機能したと評価する一方で、重伝建地区選定後の現状変更によって増加した出梁造が本来のものとは異なっていることを明らかにした。そして、「伝建制度が、本来の歴史的町並みが持っている地域性に裏付けられた景観を“歴史的町並みらしい”イメージに裏付けられた景観へ変容させる危険性を内包している」とする警鐘を鳴らした。

では何をもって歴史的町並みの真正性とするのだろうか。以上の状況を鑑みれば、「文化財はわが国の歴史、文化等の正しい理解のために欠くことのできないもの（保護法第３条）」とする歴史的町並み（伝建地区）が、果たして“正しい理解”に資する機能を有しているのかは疑問が残る。前述した福田（1996）は、「文化景観という伝統は創られたものであり、そこには本物も偽物も存在しないはずである」とするハンドラー、R・リネキンの主張を受けて、赤瓦の伝建地区の場合も、「本物であることが強調される文化財保護の立場、地域アイデンティティの表明として地域文化を顕彰する立場、さらには、自らの生活に根ざした住民の立場がときには重なり合い、ときには他を圧倒しながら、伝統を保持しているのである」と述べている。

伝建地区が自らに冠した“伝統”という言葉に対して、どのように向き合っていけば良いのか？

2005年（平成17）から始まった文化的景観制度においても、髙木（2007）が「現在ある景観を、いかにも伝統的で古来あったかのような表現で称揚し、ことさらにその景観が日本の「原風景」であるかのように言い立てるのがはたして学問的と言えるかどうか、今一度冷静になって考えてみる必要がある」と指摘しているように、町並みにおける真正性については、文化的景観も踏まえ、今後もより深い議論が望まれる。

5）その他の研究

最後に本節では、その他の論考をいくつか挙げる。

まず、地域研究などを通して広く町並み保存の現状と課題点を探った論考として、小堀（1999）は千葉県佐原伝建地区を事例として、町並み保存の地域的特性と保存の現状について、主に商業活動の変遷過程を通して考察し、多くの老舗店舗において後継者難の問題が深刻となっていることを指摘した。上田他（1999）は岡山県岡山市の足守町並み保存地区について、住居の形態的特徴を用途・構造・建築時期などの項目で調査し、さらに住民と観光客に対する意識調査を実施して現状と課題点を抽出した。片桐（2000）は、環境社会学の視点から広島県福山市鞆の浦の埋め立て架橋計画に対する歴史的環境の保存運動を取り上げて考察した。鞆の浦は現在でも計画の是非をめぐって行政と地域住民の対立が続いており、また地域内でも計画推進派と歴史的環境保存派の意見が対立している。片桐は一連の運動の経緯を詳細に追い、住民らの認識や行動の背景の一端を、鞆の浦独特の歴史・伝統性や、閉鎖的な地域社会構造に求めている。片柳（2003）は長野県須坂市における町並みに対する住民と行政の認識の変化から町並み保存における課題点をさぐった。片柳によると、町並みを排除すべきものとして認識していた行政側が、住民の保存運動の活発化を機に町並みの重要性を認識するようになっており、必ずしも両者の考え方が一致していたとは言えないことを明らかにした。

海外の事例として曹（2007）は、近年の中国では経済成長に伴う都市の再開発が盛んであり、歴史的町並みの破壊・消滅が相次いでいる現状と、町並みを保護する施策や、その内容の不十分さを指摘している。これらを鑑み、西安市に残る歴史的町並みの保存状況とその課題点を明らかにしている。

丸山他（2008）は茨城県筑西市下館地域における蔵造りの建造物群を対象として、建物の分布及び変遷の分析と、蔵の保存・取り壊しをめぐる所有者意識を考察した。当該地域は行政による統一的な保存・助成事業などが行われていない。そのため、蔵の存廃に関しては所有者の意思決定によるところが大きいこと、その意思決定に作用する要因としては、蔵の価値への認識、蔵への愛着、“家”の継承意識、町並みの意識が挙げられることなどを明らかにした。

以上のような研究は、前述した住民意識の調査分析とともに町並み保存における基礎的研究と言えよう。故に論考数も非常に多く、十分な研究蓄積を得た感もある。しかし、Ⅱ章において木原が歴史的町並みの全国リストへの記載数の増加から、一般に認識される町並みの広がりを示したように、近年でも全国町並み保存連盟が、2006年（平成18）より関東地方を皮切りに“未発掘町並み調査”を行っており、地域住民らに認識されていない町並みの掘り起こしが進められている。このような“未発掘町並み”に対して学術的評価を加え、町並み保存活動への動きにつなげていくためにも地域研究は今後とも必要であろう。

一方、大山（2004、2005）は全国の重伝建地区を、現在おかれている立地環境において分類し、それぞれの立地類型における町並み保存の現状と課題点をまとめた。とりわけ、バイパス整備による郊外化と中心市街地空洞化・平成の大合併による自治体内での地域間格差・過疎の進行による集落維持の困難さが、町並み保存における近々の問題として指摘した。そして、伊藤（2005）は過

疎地域における重伝建地区の集落維持の可能性について、宮崎県椎葉村十根川地区を事例として考察しており、伝建制度の運用のみでは集落の存続には寄与できないとした。少子高齢化による人口減少社会の中で、過疎による高齢化によって社会的共同生活が困難な“限界集落”と呼ばれる存在は社会問題化している。大山や伊藤が指摘した過疎地域での町並み保存は、これから集落消滅という危険性を常に抱えながら、集落維持のための方策とともに保存活動を進めていくこととなろう。この深刻な問題に対しては、問題解決への提言も含めた研究・議論が進展されることが望まれる。

Ⅳ　おわりに

本稿では歴史的町並み保存関連の研究動向を振り返ってきた。以下にまとめる。

まず町並み保存の萌芽と伝建制度の誕生前後は、町並み保存の制度特性などを中心とした概説的な内容が散見される。

論考としては工学的見地から景観変容の定量的分析、伝建制度や、その運用に対する課題点の抽出、町並みまちづくりへの提言のような踏み込んだ論考も見られ、実りある研究蓄積が行われてきている。

また、住民意識や観光地域変容など町並み保存に対するソフト面からの考察も人文系・工学系双方からの研究アプローチが顕著である。とりわけ、外部者の評価としてのCVMは、歴史的町並みの価値が具体的数値として判明できる点は画期的であり、今後は様々な場所での事例研究の蓄積が望まれる。観光化による様々な弊害もまた、世界遺産である白川郷を中心に多くの論考がみられた。

一方で、現実的に迫っている過疎問題に対する集落維持への対応や、福田（1996）が町並み保存における真正性を指摘したように、町並み保存そのものに対する意義付け・再検証などの議論が求められている。

文献

▼宮本雅明（2005）：「歴史的景観の保存と景観法」『建築雑誌』120巻1527号 p30～31
▼日本建築学会編（1970）：「主集 景観保存」『建築雑誌』85巻1029号 p695～751
▼日本建築学会編（1973）：「主集 日本の町並と集落」『建築雑誌』88巻1074号 p1265～1330
▼有斐閣編（1980）：「特集　文化財の保存と再生」『ジュリスト』710号
▼岡田喜秋（1967）：「いわゆる「小京都」の保存」『月刊文化財』46号 p8～11
▼岡田英男（1979）：「伝統的建造物群保存の現状」『月刊文化財』190号 p24～35
▼陣内秀信（1982）：「比較町並み学－日本の町並みの特徴－」『月刊文化財』p37～41
▼太田博太郎・児玉幸多・鈴木嘉吉・坪井清足編（1982）：『図説 日本の町並み』全12巻 第一法規
▼西山夘三監修・観光資源保護財団編集（1981）：『歴史的町並み事典』柏書房
▼木原啓吉（1982）：『歴史的環境－保存と再生－』岩波新書216
▼環境文化研究所編（1978）：『歴史的町並みのすべて』若樹書房

▼環境文化研究所編（1981）：「特集 歴史的町並みの総点検」『環境文化』50号

▼環境文化研究所編（1981）：「特集 町並み町づくり」『環境文化』53号

▼全国町並み保存連盟編著（1999）：『新・町並み時代　まちづくりへの提案』学芸出版社

▼西村幸夫（2000）：『西村幸夫 都市論ノート　景観・まちづくり・都市デザイン』鹿島出版会

▼渡辺定夫・西村幸夫（1982）：「全国に分布する歴史的環境の実態とその問題点」『日本建築学会論文報告集』312号 p109 ～ 114

▼葉華・浅野聡・吉田雄史・戸沼幸市（1998）：「伝統的建造物群保存地区を核とした歴史的景観の保全・形成のための地区指定の現状と変化に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』506号 p111 ～ 118

▼牛谷直子・明智圭子・増井正哉・上野邦一（2002）：「重要伝統的建造物群保存地区における修景実態に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』561号 p211 ～ 216

▼小林史彦・川上光彦（2003）：「伝統的建造物群保存地区制度の運用過程における実施施策の内容」『日本建築学会計画系論文集』567号 p87 ～ 94

▼福川裕一（1982）：「伝統的町並みの道路を軸とした空間構成とその現代的意味－町並み保全の意味と方法に関する一考察－」『日本建築学会論文報告集』320号 p136 ～ 145

▼温井亨（2000）：「山形県大石田町における歴史的町並みを保全した町づくりに関する研究」『ランドスケープ研究』63巻5号 p739 ～ 742

▼佐野雄二・岡崎篤行・高見沢邦郎（2000）：「伝統的様式を継承した新たな町並み景観の形成過程と計画的課題－岐阜県古川町の歴史的市街地を対象として－」『日本建築学会計画系論文集』531号 p179 ～ 185

▼馬場先恵子（2008）：「歴史的町並み景観における建物正面意匠の連続性－金沢市こまちなみ保存区域実態調査－」『金沢学院大学紀要「文学・美術・社会学編」』6号 p91 ～ 105

▼小林史彦・川上光彦・横井武志（1999）：「歴史的市街地における居住水準を考慮した町並み景観誘導のための建築形態規制－金沢市こまちなみ保存区域における事例研究－」『1999年度第34回日本都市計画学会学術研究論文集』p385 ～ 390

▼大森洋子・西山徳明（1997）：「歴史的町並み地区における観光活動設計に関する研究－福岡県吉井町を事例として－」『都市計画論文集』32号 p277 ～ 282

▼大森洋子・西山徳明（2000）：「歴史的町並みを観光資源とする地域におけるまちづくりに関する研究－筑後吉井の町並み保存事業を事例として－」『都市計画論文集』35号 p811 ～ 816

▼岡崎篤行・原科幸彦（1995）：「歴史的町並みを活かしたまちづくりにおける合意形成過程に関する事例研究－橿原市今井町地区の伝建地区指定を対象として－」『日本都市計画学会学術研究論文集』30号 p337 ～ 342

▼梅宮路子・岡崎篤行（2005）：「歴史的町並みにおける都市計画道路の見直しに関する合意形成過程－全国的状況と愛知県犬山市の事例について－」『都市計画論文集』40巻3号 p505 ～ 510

▼岡崎篤行・井澤蓉美子・髙見澤邦郎・渡辺恵子（2001）:「佐原における歴史的町並み保全のプロセスと住民意識」『日本建築学会技術報告集』14号 p315～318

▼勝又晃衣・曽根陽子・勝又英明（2001）:「連鎖的まちづくりによる中心市街地の再生に関する研究ー川越大正浪漫夢通りを対象にしてー」『日本建築学会技術報告集』12号 p173～176

▼千歳蓉一（2003）:「甘木市秋月地区における重要伝統的建造物群保存地区の現状と課題」『地球環境研究』5号 p69～78

▼公文暁・山本明・河東義之（2003）:「伝統的居住環境に対する住民の選好～髙山市三町地区を事例として～」『日本建築学会計画系論文集』565号 p233～240

▼大島規江（2005）:「伝統的建造物群保存地区における町並み保存に対する住民意識　ー長野県楢川村奈良井を事例としてー」『日本建築学会計画系論文集』590号 p81～85

▼中尾千明（2006）:「歴史的町並み保存地区における住民意識ー福島県下郷町大内宿を事例にー」『歴史地理学』48巻1号 p18～34

▼張鵬翀・市南文一（2007）:「倉敷美観地区の町並み保存活動に対する住民意識の分析」『日本都市学会年報』40号 p71～76

▼直井岳人（2002）:「観光地としての歴史的町並みの評価ー倉敷美観地区の場合ー」『岡山商科大学社会総合研究所報』23号 p85～98

▼垣内恵美子・吉田謙太郎（2002）:「CVMによる「文化資本」の便益評価の試みー世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例研究を通じてー」『文化経済学』3巻2号 p63～74

▼垣内恵美子・西村幸夫（2004）:「CVMを用いた文化資本の定量的評価の試みー世界遺産富山県五箇山合掌造り集落の事例」『都市計画論文集』39-2 p15～24

▼岩本博幸・垣内恵美子・氏家清和（2006）:「CVMを用いた伝統的建造物群保存地区の文化的景観の経済評価ー髙山市における事例研究ー」『都市計画論文集』41号 p18～24

▼大山琢央（2006）:「「ディスカバージャパン」とは何か？ー国鉄キャンペーンによる観光・社会・文化財保護動向の諸相ー」『別府大学地理学研究室　研究年報』4号 p17～24

▼森彰英（2007）:『「ディスカバー・ジャパン」の時代　新しい旅を創造した、史上最大のキャンペーン』交通新聞社

▼岡本直久・古屋秀樹・清水祐介（2003）:「観光施策が入込客数に与える影響についてー重要伝統的建造物群保存地区を抱える自治体を対象としてー」『日本観光研究学会大会研究発表論文集』18号 p121～124

▼市川健夫・白坂蕃（1980）:「木曽谷における保存修景集落の観光形態」『東京学芸大学紀要　第3部門』31号 p77～91

▼小堀貴亮・宇野存（1998）:「川越における歴史的町並み保存と観光地域化」『千葉大学教育学部地理学研究報告』9号 p61～68

▼小堀貴亮（2001）:「日田における歴史的町並みの保存と観光空間の形成」『別府大学短期大学部

紀要』20号 p 1 ～ 14

▼溝尾良隆・菅原由美子（2000）：「川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全」『人文地理』52巻３号 p84 ～ 99

▼荒井崇浩・十代田朗（2000）：「富山県五箇山の観光地化過程に関する研究」『日本観光研究学会第15回全国大会論文集』p61 ～ 64

▼縄手亜矢（2001）：「白川郷荻町集落の歴史的町並みに対する観光者及び地域住民の認識」『日本観光研究学会第16回全国大会論文集』p57 ～ 60

▼黒見敏丈・坂元さや香（2002）：「歴史的町並み観光地における観光情報提供システムの実態と課題」『岐阜女子大学紀要』31号 p９～ 16

▼才津祐美子(2003)：「「白川郷」における世界遺産登録の影響について」『旅の文化研究所研究報告』12号 p101 ～ 108

▼森田優己（2004）：「白川郷における観光客の増大と交通の課題」『白川郷－世界遺産の持続的保全への道』ナカニシヤ出版 p87 ～ 109

▼黒田乃生（2007）：『世界遺産 白川郷－視線の先にあるもの－』筑波大学出版会 p158 ～ 161、187 ～ 204

▼志賀 善一良（2000）：「歴史的町並みの保存における観光の役割　高山市三町地区を事例として」『日本観光研究学会第15回全国大会論文集』p37 ～ 40

▼大山琢央（2005）：「歴史的町並みの観光地形成－倉敷美観地区を事例に－」『総合観光研究』４号 p87 ～ 94

▼福田珠己（1996）：「赤瓦は何を語るか－沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動－」『地理学評論』69巻９号 p727 ～ 743

▼森田真也（1997）：「観光と『伝統文化』の意識化－沖縄県竹富島の事例から－」『日本民俗学』209号 p33 ～ 65

▼大平晃久（2003）：「歴史的環境保全と農地－城下町の保全・整備計画を対象として－」『農村空間の研究（上）』大明堂 p452 ～ 469

▼須山聡（2003）：「富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成－観光の舞台・工業の舞台」『地理学評論』76巻13号 p957 ～ 978

▼牛谷直子・増井正哉・上野邦一（2004）：「重要伝統的建造物群保存地区における現状変更に伴う景観変容に関する研究　楢川村奈良井重要伝統的建造物群保存地区を事例として」『日本建築学会計画系論文集』582号 p81 ～ 86

▼髙木徳郎（2007）：「荘園村落遺跡と文化的景観」『歴史評論』687号 p３～ 16

▼小堀貴亮（1999）：「佐原における歴史的町並みの形成と保存の現状」『歴史地理学』195号 p21 ～ 34

▼上田恭嗣・村上佳子・杉本悦奈（1999）：「伝統的町並み保存に関する一考察－陣屋町・岡山市

足守地区の場合ー」『山陽学園短期大学紀要』30巻 p47 ～ 54

▼片桐新自（2000）:「港町の活性化と保存ー鞆の浦を対象にしてー」『シリーズ環境社会学3 歴史的環境の社会学』新曜社 p80 ～ 105

▼片柳勉（2003）:「歴史的町並みの保全と認識の変化ー長野県須坂市を事例としてー」『地球環境研究』5号 p59 ～ 68

▼曹婷（2007）:「西安市における歴史的町並み保全とその課題ー書院門街，北院門街，徳福巷を事例としてー」『人文地理』59巻5号 p36 ～ 51

▼丸山美沙子・水谷千亜紀・小島大輔・山﨑恭子・長坂幸俊・ブランドン＝マナロ＝ヴィスタ・星正臣・吉田亮・松井圭介（2008）:「地域資源としての歴史的建造物の利用とその課題ー茨城県筑西市下館地域を事例としてー」『地域研究年報』30号 p109 ～ 141

▼大山琢央（2004）:「九州地域における歴史的町並み（重伝建地区）の立地に関する研究」別府大学大学院文化財学専攻修士論文

▼大山琢央（2005）:「重要伝統的建造物群保存地区の立地に関する考察」『史学論叢』35号 p21 ～ 40

▼伊藤彰浩（2005）:「隔絶地域に立地する重伝建地区の存続に関する研究ー宮崎県椎葉村十根川地区の事例ー」別府大学大学院文化財学専攻修士論文